

膝蓋靭帯炎に対する鍼治療の効果 ～大腿部への刺鍼（浅刺・深鍼）の有効性に関する RCT ～

井上 基浩, 今枝 美和, 糸井 恵, 北小路 博司

鍼灸学部臨床鍼灸学講座

【目的】膝蓋靭帯炎に対して、基本的な刺鍼を膝蓋靭帯圧痛部とし、加えて行った大腿部への浅刺と深刺の効果の差をランダム化比較試験（RCT）により検討した。

【方法】膝蓋靭帯炎と診断された患者 8 例 13 肢とした。大腿部浅刺群（浅刺群：4 例 7 肢）、大腿部深刺群（深刺群：4 例 6 肢）に割り付けた。治療は両群ともに膝蓋靭帯圧痛部 1 箇所（深刺群：7mm）し、浅刺群は大腿前面部、鼠径部（大腿神経走行部）に浅刺（深刺群：5mm）した。深刺群は、浅刺群と同一部位に深刺（1～3cm）を行った。なお、深刺群も治療 4 回目までは浅刺とし、5 回目以降を深刺とした。治療は合計で 9 回（1 回／週）行った。Visual Analogue Scale（VAS）にて評価した。

【結果】初回から 5 回目治療前と 5 回目治療前から 9 回目治療前の変化量を算出し、群間比較を行った。その結果、5 回目治療前から 9 回目治療前の変化量において深刺群の方が有意に良好であった。

【考察・結語】深刺群が良好であった理由として、大腿四頭筋への刺鍼が当該筋の筋緊張を低下させ、また、大腿神経近傍への刺鍼が、膝蓋靭帯や大腿四頭筋の血流に変化を与えた可能性を考えた。

頸部神経根症に対する鍼治療の臨床効果 —前向き症例集積研究—

今枝 美和, 北小路 博司, 糸井 恵, 井上 基浩

臨床鍼灸学講座

【目的】頸部神経根症による上肢症状に対する頸部傍脊柱部への鍼治療の臨床効果を検討した。

【方法】本症と診断された上肢痛・異常感覚を有する患者 15 名 16 肢を対象とした。障害高位を中心とした頸部傍脊柱部、最大 10 ヶ所を施術部位として、週 1 回の割合で計 4 回の鍼治療を行った（刺入深度：10～20mm、雀啄術）。各回の治療前と治療終了 1 ヶ月経過時に Visual Analogue Scale（VAS）を用いて症状の程度を確認し、治療前と 4 回の治療終了時および治療終了 1 ヶ月経過時には Neck Disability Index（NDI）と頸部神経根症治療成績判定基準を用いて QOL 評価を行った。

【結果】VAS の経時的変化パターンに関して、全てにおいて有意な変化を認めた（頸肩部痛： $p<0.0001$ 、上肢痛： $p<0.0001$ 、上肢異常感覚： $p<0.001$ ）。また、NDI、頸部神経根症治療成績判定基準何れにおいても同様に有意な変化を認めた（NDI： $p<0.0001$ 、頸部神経根症治療成績判定基準： $p<0.0001$ ）。治療前と 4 回目の治療前の比較において有意差を認めたことから治療の継続による効果が確認され（ $p<0.001$ ）、さらに、治療終了時と治療終了 1 ヶ月経過時の比較においては有意差を認めず、一定期間における治療の持続効果が確認された（ $p=0.52$ ）。

【考察】頸部傍脊柱部への鍼治療は頸椎疾患による上肢症状に対して継続効果、持続効果が期待できる有用な保存療法である可能性が示唆された。